

科学者委員会 学術体制分科会（第 25 期・第2回）

議事要旨

1. 日時 令和3年4月28日（水）14:00～16:07
2. 会場 オンライン会議（Zoom）
3. 出席者
吉村委員長、橋本副委員長、北川幹事、佐々木幹事、伊佐、石塚、梶田、小林（武）、小林（博）、中西、萩田、菱田、光石、望月、山田
（参考人）国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー 岩瀬公一氏
（事務局）松室参事官、川名上席学術調査員他

4. 議事

1) 前回議事要旨の確認

- ・事前にメール配布をしていた資料1については、議場での再確認や意見はなかった。

2) 調査報告書「オープン化、国際化する研究におけるインテグリティ」に関するヒアリング（参考人 国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー岩瀬 公一氏）

資料2に基づき、岩瀬氏から直接説明を受けた。

私の所属するJST/CRDSは研究開発の戦略や科学技術イノベーション政策の提言をする公的なシンクタンクである。本日は昨年10月に取りまとめた報告書の概要を中心に紹介する。資料にはその後の動向・情報も一部追加している。報告書で提案している内容の要点は以下の通り。

- ・「研究のオープン化・国際化が世界的に近年著しく進み、それに伴い、研究システムの健全性・開放性に対するリスクや、技術流出を中心に経済安全保障も含めた国家安全保障上のリスクが顕在化している」という認識が世界的に広まっている。
- ・このリスクへの対応として、我が国でも国家安全保障上の観点から規制強化の動きがあるが、過度の規制のみに頼った対応は研究自体の活力が損なわれる懸念がある。
- ・我々の問題意識は、この問題に関し研究者コミュニティが受け身になるのではなく、このようなリスクを受け止めて主体的・建設的な対応をする必要があるのではないか、という点である。
- ・問題とされる事例の多くに共通するのは「利益相反」の問題が背景にあることである。
- ・この問題への対応の基盤となるのが、研究者や研究機関自身が責任ある行動を通して、自らの研究環境を健全・公正に保つこと、すなわち「研究インテグリティ」の強化に取り組むことであると考える。その際、利益相反に重点的に取り組むことが重要である。
- ・そのためにはまず、日本全体で個々の研究者が、所属する研究機関に対し利益相反に関する情報をしっかり開示つまり申告することから始め、それをもとに個々の機関で判断・管理する経験を地道に積み重ね、その知見を機関間で共有することで研究システムあるいはプロセスの透明性の向上を行うことを提案している。

（以下資料に沿って説明）

3) 質疑応答

- ・岩瀬氏からの講演に対して質疑応答及び意見交換を行った。

4) 主な検討課題と今後の審議予定

- ・資料3を委員長が読み上げ確認し、その後、資料3及び岩瀬参考人の講演内容を基に意見交換を行った。
- ・委員長より、意見交換を基に今後の方針に関し早めに論点整理を行い、具体的な取組方針については、更に審議を重ねまとめるというスケジュール感が示された。

5) その他

- ・終了後、次回分科会の日程調整をする。

資料：

資料1 前回議事要旨（案）

資料2 （JST/CRDS報告書） 「オープン化、国際化する研究におけるインテグリティ」の概要
（参考人 科学技術振興機構 研究開発戦略センター上席フェロー 岩瀬公一氏）

資料3 学術体制分科会（第1回）で指摘された主な論点等

資料4 研究インテグリティ関連調査対象一覧（2021. 2. 4版）